

## 石井至の世界放浪記

突如、カンボジアから：

一月号掲載の原稿は、「年末進行」で締切が早かったので、十二月に中旬までの話を書いた。今月はその続きだ。

十二月上旬にアルバニア、ポルトガルの旅から戻ったある日の夜中、突然、私の携帯が鳴った。カンボジア政府関係者からの電話だった。「ドクター石井。十二月三十日の夜に、観光大臣がディナーと一緒にしたいと言っている。プノンペンまで来ることができるか？」という内容だった。ちょうど十二月二十九日からは予定が空いていたので「行く」と即答した。ただ、晩御飯と一緒に食べるためだけに、わざわざ東京から私を呼び出すのはいかにも不自然だ。何の話だろうと思ひながら、翌日すぐに赤坂のカンボジア大使館にビザを取りに行った。

今のところ、日本とカンボジアの間には定期の直行便は飛んでいない。プノンペンに行くには、バンコク経由か香港経由で行くことになる。

バンコク経由なら、夜中一時に羽田を出発するナイトフライ

トでバンコクまで行き、早朝にプノンペン行きに乗り換えて、現地時間朝九時すぎに着く。

香港経由なら朝十時に羽田を出て、香港でドラゴン航空に乗り換えると午後五時半すぎにプノンペンに到着する。

ディナーは夜七時だったし、それに間に合えばよかったので、香港経由で行くことにした。

## 賑わうプノンペン

プノンペン空港に着くと、まるでVIPの扱いだった。他の国でも何度か経験はあるが、バスポート・コントロールなどは通らず、そのままVIP用ルートで高級外車まで乗る。パトカー先導で宿泊先まで移動だ。信号も渋滞も関係なく、一度も停まらずにホテルまで着いたのは驚いた。

宿泊先はナガワールドというカンボジアで唯一のカジノホテルだった。客室が千室を超える大型ホテルで、カジノのテーブルが二百以上、スロットマシンも千五百を超える。シンガポールのカジノホテル、マリーナベイサンズと同等の規模だ。

私は、カジノはほとんどやらない。過去に数回やったことがあるが、五千円程度で初めて減って回復したらやめるというのが関の山だ。博打の類は損する宿命だと思っているから、まったく興味が無い。ただ、ホテルは年末だったこともあるだろうが、中国やベトナム、ミャンマー、ラオスなどの近隣の国からたくさんのお客さんが来ていて大繁盛の様子だった。

## 夜七時。カンボジアの観光

大臣のコーン博士とのディナーは、ナガワールド・ホテルのフレンチレストランだった。カンボジアもフランス領だったからフランス料理はおいしい。

## カンボジアブームの予感

大臣からの話は、「日本からもつと観光客に来てほしいので手伝ってほしい。ついでに、カンボジア観光省のアドバイザーになつてくれないか」という話だった。個人的には、次にブームがくるのはカンボジアだと思っているの、喜んで引き受けた。

まずは日本との直行便を飛ば

したいということだった。ただ、すでに昨年、安倍首相がカンボジアのフンセン首相と会ったときに、二国間航空協定を結ぶことについては合意しているということだった。その具体的な段取りを国土交通省とカンボジア航空当局との間で進めないといけないが、これには私の出る幕がなく、自然と進んでいるようだ。

翌日にはとんぼ返りだ。大晦日の昼ごろにプノンペンを出発し、日本に帰国したのは午後九時。なんとか年内に帰国を果たし、忙しい一年を終えた。

が、年明け早々、本の原稿の締め切りに追われ、中旬にはロンドンから友人のジャーナリストが来日したので彼の世話を焼き、また、翌週は東南アジアからのお客さんの対応だった。

「〇〇暇なし」を地で行く年が、また新しく始まった感じだ。我が友・木村三浩さんについて、報道で新情報も耳に入っているが、木村さんの無事を祈って見守りたい。

## 石井 至 (いしい・いたる)

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。